

井戸、小川、水道 昔も今も湖北の暮らしを支える 高時川の水の恵み

今は水道の蛇口をひねれば水が出ます。かつては暮らしの生活用水をすべて高時川に頼っていたと聞いたことがあるけれど、それは昔々の思い出話…そう思われるかもしれません。でも、果たして本当にそうでしょうか。高時川下流、長浜市早崎町の松井保さんと中流、湖北町大安寺の兼房右門さんに、昔と今の暮らしの水についてお話をうかがいました。



水路での洗い物がしやすいように、立派な覆いがついています。外側(右)と内側(左)(湖北町)

豊かな井戸をもたらしした 扇状地の伏流水

早崎町の松井保さん宅周辺は、高時川流域で地下水に恵まれた扇状地に位置する所です。井戸を30mも掘れば地下水が自然に湧き出します。昭和30年代に水道ができるまでは、この井戸ですべての生活用水をまかなっていました。湧き出した水は3つの水槽で順に受けて利用しました。一番上の水槽は飲料水用、二つ目は洗顔や野菜洗い、三つ目は洗濯など用途が決まっていました。



▲三槽式の水槽(長浜市早崎町)

「井戸の水を台所や風呂に運ぶのは子供の役目。どこの家でも小学校高学年になれば毎日水運びをやらされるのが普通でした。当時は稲刈りの季節に学校が休みにならなように、家の営みに子供も役目を担って参加していました」
地下水が豊かだったため各家庭に井戸があり、家族全員に水に關する役目がありました。
松井さん宅では水道が完備した

今でも井戸は元気で、こんこんと水が湧き出しています。

「年中14〜16℃の井戸水は夏は冷房に使えます。井戸水をパイプで部屋に引いて冷風機に通し、冷房がまかなえています。ほかに水道が断水したときも安心。役立つています」



▲掘り抜き井戸(長浜市早崎町)

井戸や打込み井戸を作られた農家もありました。2〜3mも掘れば水がにじみ出てきて、きれいな水がたまります。畑の中の井戸だけに、これ以上身近で手軽な農業用水はありません。

その他にも地下水を利用したものに、打込み式集水型消火栓があります。

琵琶湖岸に極めて近い地域ですが、この豊富な地下水は高時川と扇状地という地形がもたらしたものです。地下に「天然の水瓶」があって水が貯えられているからです。もし、これがなければ琵琶湖が近くにありながら、生活用水にもより苦労したはずですよ。

地下水不足が生んだ

「川のある生活」

早崎町より少し上流、大安寺の兼房右門さん宅周辺は、70mほど掘ると地下水が出ることはあるのですが、ひとつ間違えると鉄気がひど

くて使いものになりません。

そのようなところでは、高時川から引いた水が流れる「水路」の水を利用しました。この水路から水を分け小さな水路を造り集落の中を流し利用していました。この大安寺でも早崎町と同じ様に、台所の瓶を水で満たし風呂でつかう水を運ぶのは子供たちで、大変な仕事でした。「昭和40年に水道ができるまでは、生活用水はすべて家の横を流れる水路からくんだ水。飲料水はこし器でろ過して使っていました。底近くに栓のある瓶にシロ炭、砂を数層詰めたものです」

夏は水路をせき止めて、100mプールにして遊んだり、一部の家では水路の水を敷地内に引いて「イケ」をつくり、高時川でとった魚を放つて泥を吐かせてから食用にしたりしていました。冬場は水路が格好の雪捨て場。また、当時は年に2〜3回、水路をきれいに保つため集落全員で川ざらえをすることに、集落の人々のコミュニケーション

シヨンの機会となり人の和の元にもなっていました。

「よその地域と同じように、風呂の排水は便所に、台所などの排水は畑に流し、水路には戻しません。水路の洗い場では野菜を洗ったりしましたが、肥桶など汚れたものを洗う場合は集落の最も下流で洗うのが申し合わせ。水路の水を利用することでマナーや社会性が身につきました」

水の恵は高時川のためもの

水路は「景観」「癒やし」「防火」「消雪」の機能を持っていました。

「昭和46年には場整備が始まり、集落の水路に水があまり回らなくなりました。しかし、今改めて「川のある生活」のよさが見直され「親水路」や「親水公園」を作り始めたのもその一環です」

現在、水道ができて蛇口をひねればすぐに水が出る環境が整っています。しかし、この水道も高時川を流れる水が涵養した地下水を利用したもの。高時川の堤防沿いに地下水を生活用水として利用するための「集水型涵渠」もあり、他所にはないこの地域だけの特徴になっています。

井戸や水路から水道へ。時代と共に手段は変わっても、高時川の水の恵みが暮らしを支えるのは昔も今も変わりません。



▲打込み式集水型消火栓(長浜市早崎町)

お話を伺った方



松井保さん
長浜市早崎町在住。農業。



兼房右門さん
湖北町大安寺在住。水
土里ネット湖北技術参事。

時しく解説 扇状地

扇状地とは、山地を流れてきた川が平野や谷口など勾配がゆるやかになった部分に作る扇型の砂礫堆積地のこと。勾配がゆるやかになると流れが弱くなり、川の水に含まれていた砂礫が堆積するためにできます。扇の「要」に相当する部分を「扇頂部」、中央を「扇中部」、末端を「扇端部」と呼びます。

砂礫は重いものから順に堆積、細かなものほど遠くへ運

ばれるため、扇頂部を構成する砂礫が最も粗く、扇端部に向って細い砂礫が多くなります。このため、扇頂部近くほど水がしみこみやすく、水量の少ない河川では水無川となることがあり、扇端部では湧水となることがあります。



扇頂：扇の要にあたる部分
扇中：扇頂と扇端の間の部分
扇端：扇の端の部分